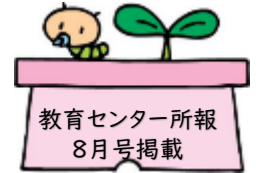


そだちのねっこ

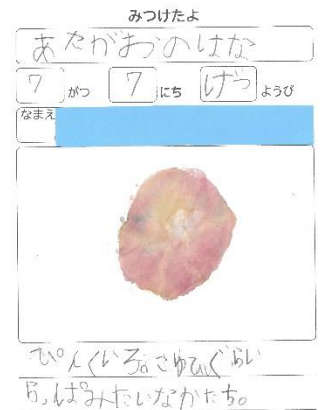
～乳幼児期の遊びより～



【「え～、葉っぱもしていいの？」～『やってみたい!』が学びの芽～】

7月7日(月)、小学校1年生の生活科の授業を見学してきました。単元は『はなをさかせよう』で、自分で育てている朝顔の鉢を机の横に置いていました。前回の授業では『つぼみ』を観察し、この日は『はな』に着目した授業でした。担任の先生の笑顔がとても温かく、安心して授業を受けることができる雰囲気を感じました。また、「おたのしみ!」「ズーム」「サンドイッチします」「おまけ」など、子どもたちが「何々?」と興味をもち、ワクワク度が増すようなワードを意識して使われていることもわかりました。

映像で、『朝顔のはなのこすりぞめ』を観ました。「すごい!」「わあ～!」「なんで?」など、半紙に花の色が付くことに大興奮していました。しかし、いざ自分もするとすると、大事に育てて咲いた『朝顔のはな』をハサミで切ることに抵抗を示す子どももいましたが、「またすぐに咲くよ」との先生の言葉で安心して花を切っていました。「どんな風になるんやろ?」「おんなじにできるかな?」と期待する声とともに、「僕の朝顔は白いから、なんも色つかんと思うわ」「花がばらばらになったからテレビみたいにならん」など、思っている結果とは違うことになりそうと少し不安な声も出しながら活動していました。そと半紙を広げる時、半紙に色が付いているのを見た時の子どもの表情の変化がとてもかわいかったです。「みてみて!めっちゃ丸くなってる」「あれ?色薄く付いてるやん!」「わあ～、なんかきれいな模様になってる」「(…匂いを嗅いで)草みたいな匂いする!」など、形や色、匂いの変化にまた大興奮していました。

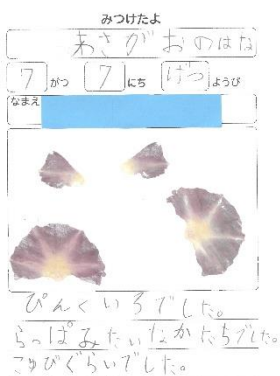


そんな子どもたちの様子を見ながら、先生は「葉っぱやったらどうなるんやろ?」と問いかけました。すると、「えっ?葉っぱ?」と目を丸くし、ワクワク度満載の表情に変化しました。まさにこの表情の変化こそが、『やってみたい!が学びの芽』だと、見学している私までワクワクしてしまいました。すでに、たくさんある葉っぱを選んでいる子どもたちの姿を見て、先生は「やってみる?」と聞かれました。「え～!葉っぱもしていいの?」「やってみたい!」「やってみる!」と子どもたちの意欲が最高潮になった瞬間でした。「僕は大きいのでやってみるわ」「どうなると思う?」など、周りにいる友だちとワクワクを分かち合いたくて、対話も弾んでいました。葉っぱをこすりながら、「なんかお花と違って硬いな～」「おっ!緑出てきた!」「後ろからもしっかりこすらなな」と、『朝顔のはなのこすりぞめ』を経験したからこそ、出てくる発言だと感じました。

最後に、「今日、発見したことあった?」との先生の発問に対して、またまた大興奮し、目をキラキラさせて挙手する子どもの姿が印象的でした。そして、「花をこすったら、花が消えた。でも、手で触ったら薄っぺらくなった花びらが出てきた」「葉っぱに毛があったのに、こすったらなくなった」「葉っぱのジュースが出てきた」「葉っぱこすったら、なんか匂ってきてやばかった」「花と違って葉っぱはお水の通る道が硬くてこすの力いった」など、実体験で感じたことを自分の言葉で伝えようとする姿は、まさに学びに向かう力につながったと同時に、本時のめあて『はなのようすをつたえよう』が達成できたと思いました。

小学校では、教科ごとに決まった単元を教えることが教員に求められますが、私が今回見学した授業では、子どもたちの『やってみたい!』意欲を引き出すために、教材研究や、授業の組み立て、先生の言葉かけなど幼児教育とつながる部分をたくさん見ることができました。

45分椅子に座っているか、先生の話をしっかり聞いているか、指示された通りに書いているかなど、できる・でき



ないことだけを重視すると、指示や注意が多くなってしまいます。しかし、子どもたちの心が動き、『やってみたい!』の意欲が育つ授業は、あっという間の45分でした。できる・できないの結果だけを重視するのではなく、そこに至るまでの過程を大事にする授業が魅力的であると同時に、幼児教育で大事にしている非認知能力の育成が小学校以降の認知能力にもつながっていく部分だと感じました。